

「学びあいの場」の つくりかた

徳田太郎（著）
つくば市民大学（監修）

響きあう関係が紡がれ、新しい価値が醸される。
異なりから豊かさがうまれ、希望と知恵が育まれる。
そんな「学びあい」の場をつくるためのヒント集。

つくば市民大学

まなぶ つながる つくりだす

頒価 500円（税込）

うち50円は「いばらき未来基金」への寄附金として、茨城県内の地域課題の解決に取り組む市民活動の活性化に充てられます。

～ 本ブックレットの内容 ～

1) かんがえかた

そもそも「学びあい」とはどのようなものか、なぜ私たちは「学びあい」を重視しているのか、「学びあい」においては何が大切なのかを、4つのキーワードを通じて解説しています。

- なぜ学びあい（ワークショップ）か ～正解のない時代に学ぶということ～
- 学びあい（ワークショップ）とは ～「先生」にならなくてよいのです！～
 - キーワード1・他人事ではなく「自分事」
 - キーワード2・出席者ではなく「参加者」
 - キーワード3・知識重視ではなく「体験重視」
 - キーワード4・一方通行ではなく「相互作用」

2) つくりかた

企画づくり（プロデュース）のポイントを記しています。テーマの設定の仕方、プログラムのつくり方を中心に、「思いをカタチにする」方法を考えます。

- プロデュースとは ～「この指とまれ！」の旗をつくって大きく振る～
 - テーマ設定 ～地域や社会が「こうなったらいいな！」から始める～
 - 政治・経済ではなく「関係」にフォーカスして解決策を探る
 - アウトカム（講座終了時にどうなっていればよいか？）を明確にする
 - プロセス（全体の流れ）とプログラム（各回の進め方）をデザインする

3) あつめかた

コーディネーションとプロモーションという2つのキーワードをベースに、学びを深めるためのゲストに参加を呼びかけたり、講座の参加者を募ったりする際の留意点をまとめています。

- コーディネーションとは ～人と人とを対等につなぎハーモニーを得る～
 - 誰に・どのように参加してもらうかをデザインする ～「参加のしおり」の例～
 - 誰に・どのように話題提供してもらうかをデザインする ～「話題提供のお願い」の例～
- プロモーションとは ～大切なのは「伝える」ことではなく「伝わる」こと～
 - アナログもデジタルも「視座・視野・視点」を意識する

4) はこびかた

講座当日の「場のつくり方」を、ファシリテーションという概念を下敷きにして解説しています。ほんの少しの工夫で「学びあい」が実現できることを感じていただけたと思います。

- ファシリテーションとは ～響きあう場の「助産師」になろう！～
 - オリエンテーション（方向づけ）を工夫する
 - レイアウト（机・椅子の配置）とグループサイズ（話しあう人数）を工夫する
 - チェックインとチェックアウト（一人一言で思いを分かちあう）を行う
 - テーマやルールの「見える化」で対話の場をホールドする

5) つづけかた

ふりかえり（リフレクション）により講座企画者自身の学びを深めるとともに、学びを「次につなげる」ためにどうすればよいかを考えます。

- リフレクションとは ～立ち止まれば次のあり方・やり方が見えてくる～
 - コンテンツ（何を学んだか）をふりかえる
 - プロセス（どう学んだか）をふりかえる
 - 「つながる」と「つくりだす」を意識する

「学びあいの場」のつくりかた

徳田太郎（著）
つくば市民大学（監修）

～ も く じ ～

はじめに	p.02
1) かんがえかた	p.04
2) つくりかた	p.10
3) あつめかた	p.16
4) はこびかた	p.22
5) つづけかた	p.27
おわりに	p.31
つくば市民大学について	p.32

はじめに

いまや、誰かが誰かを教育するのではない。

人々は、交わりの中で互いに教育しあうのだ。

——パウロ・フレイレ

「まなぶ・つながる・つくりだす」をキャッチコピーに、さまざまな講座を開いているつくば市民大学。講座を企画・運営するにあたっては、いくつかの「こだわり」を持っています。

その一つが、「参加・体験型で、相互作用を大切にしたい講座であること」というもの。一方通行の講義形式で「教える」講座ではなく、参加者同士の対話などを通じて互いに「学びあう」講座であることが、開講の一つの条件となっています。

しかし、「参加・体験型って、どういうことだろう？」と、なかなかイメージがわからないという方も多くいらっしゃると思います。確かに、子どもの頃から、何かを「学ぶ」といえば、おとなしく先生の話聞くことだと「教えこまれて」きたのですから、無理ありません。

そこで、このハンドブックの登場です。

このハンドブックでは、参加・体験型の講座をつくるための、基本的な考え方やちょっとした工夫を、いくつかのポイントにまとめてみました。いずれも、つくば市民大学での実践の中で生まれ、育まれた「知恵」ばかりです。

「これ一冊ですべてがマスターできる！」というわけにはいきませんが、「講座を開いてみようかな」という方には最初のマニュアルとして、また「よりよい講座にしたいんだよな」という方にはヒント集として、十分にご活用いただけるものと自負しております。

第1章の「かんがえかた」では、そもそも「学びあい」とはどのようなものか、なぜ私たちは「学びあい」を重視しているのか、「学びあい」においては何が大切なのかを、4つのキーワードを通じて解説しています。

第2章の「つくりかた」では、企画づくり（プロデュース）のポイントを記しています。テーマの設定の仕方、プログラムのつくり方を中心に、「思いをカタチにする」方法を考えます。

第3章の「あつめかた」では、コーディネーションとプロモーションという2つのキーワードをベースに、学びを深めるためのゲストに参加を呼びかけたり、講座の参加者を募ったりする際の留意点をまとめています。

第4章の「はこびかた」では、講座当日の「場のつくり方」を、ファシリテーションという概念を下敷きにして解説しています。ほんの少しの工夫で「学びあい」が実現できることを感じていただけたと思います。

そして第5章の「つづけかた」では、ふりかえり（リフレクション）により講座企画者自身の学びを深めるとともに、学びを「次につなげる」ためにどうすればよいかを考えます。

原則として、つくば市民大学での講座開催を念頭に記していますが、生涯学習や社会教育における各種講座はもちろんのこと、セミナーやワークショップ、シンポジウムやフォーラムなど、さまざまな現場で応用が可能です。ぜひ、ご自身の現場に置き換えて、適宜「翻訳」しながら読み進めていただければと思います。

人々がともに集いあい、問いあい、語りあい、聴きあい、学びあうことで、響きあう関係が紡がれ、新しい価値が醸される。異なりから豊かさがうまれ、希望と知恵が育まれる。そのような、民主的で創造的な場と機会が、あちこちに生まれることを願って。

みなさんの実践に、少しでもお役に立てば光栄です。

2015年3月

ユニベルシタスつくば代表幹事 徳田 太郎

1) かんがえかた

■ なぜ学びあい（ワークショップ）か ～ 正解のない時代に学ぶということ ～

なぜ、つくば市民大学では、「参加・体験型で、相互作用を大切にした講座であること」にこだわりを持っているのか？ それは、つくば市民大学が、単に「まなぶ」ことにとどまらず、「世代や立場、組織の枠をこえて交流する（つながる）なかで、地域や社会の課題を解決するために私たち自身ができることを探っていく（つくりだす）」ことを意識していることと関連します。

一方通行の講義形式では、参加者同士が「つながる」ことはできません。また、「教えられる」だけでは、そこから主体的なアクションを「つくりだす」ことは困難です。だからこそ、対話などを通じて互いに「学びあう」ことを大切にしているのです。

やや図式化・単純化したとらえ方ではありますが、そもそも、いわゆる「教室形式」の学びは、産業革命以降の工業社会で、「同質なモノを、より多く、より速く」つくるために、その担い手として、「同質なヒトを、より多く、より速く」育てる必要性から生まれた形式です。いわば、「正解」を知っている人が、知らない人に対して「伝達」することが、もっとも効率的な方法だったのです。

しかし、これだけ変化のスピードが速く、価値観も多様化している時代にあっては、もはや「正解」はありません。個別具体的な課題に対して「最適解」を見出していく以外にないのです。そこでは、「誰かが考え、誰かが決める」ことには限界があります。一人ひとりが情報や知識、技術や知恵を持ち寄ることで、「みんなで考え、みんなで決める」必要があります。

また、単なる「情報や知識のインプット」であれば、これだけ情報技術が進化した時代にあっては、一人でも可能です。集いあった時には、「集いあったからこそできること」に集中したほうがよいでしょう。そして私たちは、その「創造」のプロセスを通じて、互いに「学びあう」ことになるのです。

■ 学びあい（ワークショップ）とは ～「先生」にならなくてよいのです！～

前ページの、「正解」を知っている人が知らない人に「伝達」する形の学びを、工業社会に対応するための「工場＝ファクトリー型の学び」と呼ぶとすれば、課題に対する「最適解」を「創造」するプロセスを通じて学ぶようなあり方は、職人さんたちが、知恵を出しあいながら一点ものの製品を作っていくプロセスになぞらえて、「工房＝ワークショップ型の学び」と呼ぶことができます。

ワークショップとは、「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して、共同で何かを学びあったり創り出したりする、学びと創造のスタイル」（中野民夫さん）です。「講義など一方的な知識伝達のスタイル」ではないため、そこには先生はいません。「参加者が自ら参加・体験」するのですから、その場にいる人はお客さんでいることはできません。「共同で何かを学びあったり創り出したりする」のですから、はじめから決まった「答え」があるわけでもありません。

「ワークショップ型の講座」の、具体的な例を見てみましょう。つくば市民大学では、2011年に「防災ラジオドラマをつくろう」という全4回の連続講座を開催しました。小学生からシニア世代までの参加者で、防災科学技術研究所主催の「防災ラジオドラマコンテスト」への応募作品を制作したのですが、地域にはどのような防災課題があるかを調べ、課題を解決するためにはどのような行動が必要かを考え、それをもとにドラマづくりのアイデアをだし、アイデアを元にシナリオをつくり、それぞれの得意分野を活かしながら演出や音響効果、配役などの役割分担を決め、演出上のアイデアを出しあい、リハーサルをしてはシナリオを書き直し……というプロセスを4ヵ月にわたって体験する中で、地域のこと、防災のこと、そして、背景の異なる人同士が一緒に何かを創り出すことの難しさと面白さを、ともに学んでいきました。

そしてこの講座には、話しあいの進行役や、必要な情報や知識を提供する話題提供者はいましたが、「先生」と呼ばれる人はいませんでした。それでもそこには、豊かな「学び」があったのです。

□ キーワード1・他人事ではなく「自分事」

それでは、ワークショップ型の講座、学びあいの場をつくる際に、どのようなかたがえかたを大切にすればよいのでしょうか？ ここでは、4つのキーワードから紐解いてみたいと思います。

1 つめは「自分事」です。そこで話されていること、そこで考えること、そこで結論となること、そこで学ぶことが、「どうせ、自分とは関係のない、どこかの誰かのことだしなあ」(＝他人事)となるのではなく、「そうか、他ならぬ自分自身に関係することなんだ」(＝自分事)と、みんなが思える場になる。それこそが、ワークショップ型講座の最大の特徴であると思います。

2014年に開催した「ガンジーに学ぶリーダーシップの旅」という講座を例に挙げてみましょう。つくば市民大学での講座ですから、間違っても「伝記をなぞり、教養を深める」ような講座ではありません。ガンジーの「もし君が世界に変化を望むなら、君自身が変化そのものになれ(変化そのものであれ)」という言葉を導きの糸に、「持続可能な社会のために、自らがどのような変化になる(変化である)のか、参加者一人ひとりが持論を見出し、選択し、行動する」ことをめざして開催されたものです。

しかし、「ガンジー」にせよ「リーダーシップ」にせよ、ともすれば「他人事」となりがちなテーマであることは間違いありません。そこでこの講座では、講座での対話と、現場でのそれぞれの実践を橋渡しするために、「ブリッジシート」というツールを用いました。「講座の中で学んだことをどう日常に活かすか」という「現場へのブリッジ」と、「日々の暮らしの中で感じたこと・考えたことをどう講座に持ち込むか」という「現場からのブリッジ」の2つを、講座と講座の間に記入・提出していただき、それをベースに講座での対話を深めていったのです。

「いいお話を聞いた、楽しい時間を過ごした。でも、講座に参加する前と後とで、自分の考え方・生き方・暮らし方にはまったく変化がない」にならないように、いかに「自分事」として学び、学びを「自分事」としていくか。それを考え、実現していくことが、学びあいの場をつくる際の基本となるのです。

□ キーワード2・出席者ではなく「参加者」

もちろん、「ブリッジシート」のようなツールを用いなければ、「自分事」感を育むことができないというわけではありません。残り3つのキーワードを意識すれば、十分にそれは可能となります。

2つめのキーワードは「参加」です。イメージをつかみやすくするために、「出席」という言葉と対比させてみました。出席者と参加者、どのようなニュアンスの違いを感じるでしょうか？

いろいろと考えられますが、たとえば「出席簿」に○印がついていれば、その人は「出席」したことになります。しかし、居眠りしていても「出席」です。本当に「参加」していたかどうかは分かりませんよね。このように、「参加」の方がより能動的・積極的・主体的なイメージがあるのではないのでしょうか。

おそらく、出席者というのは「答えを持って帰る人」なのでしょう。それに対して参加者は、「その答えをつくり出す側に回っている人」であるということが出来るかもしれません。

みんなを参加者にするということ。これはつまり、「受け身のお客さん」にしないようにしよう、ということです。消費社会の進展に伴い、私たちは見事に「サービスの受け手」としての振る舞いが習慣化してしまっています。これをいかに転換していくかを考えよう、ということですね。

つくば市民大学の講座の多くは、「チェックイン」で始まり、「チェックアウト」で終わります（→p. 25）。開始時には、講座に対する自分自身の動機（なぜ、いま・ここにいるのか？）や期待（終わった時に、どうなっていたいのか？）を言葉にすることで確認し、終了時には、感想（どのような体験をし、どのように感じ、考えたのか？）を言葉にすることで確認する。それだけでも、参加の度合いは大きく高まるのではないのでしょうか。

また、チェックインは、進行役や話題提供者にとっても、非常に有意義なものとなります。参加者がどのような状態にあり、何を期待しているのかが把握できるからです。それに合わせて内容や進め方をアレンジすることで、より「参加者が主役」の場にする事ができるでしょう。

□ キーワード3・知識重視ではなく「体験重視」

3つめのキーワードは「体験」です。

この「体験」には、2つの側面があります。1つは、「参加者一人ひとりが、自分自身のこれまでの体験を踏まえて考え、体験に根ざした言葉で語れるようにしよう」ということです。「どこかで聞いた、誰かの話」をなぞっていても、なかなか当事者意識を感じることはできません。しかし、自分自身が体験したことをベースにして考え、語りあえば、まさにそれは「自分事」となるのではないのでしょうか。

2014年の講座「フューチャーセッション・『わたしたちの公園』をつくる！」は、「いまある公園を、できるだけ多くの人が楽しめるものにするには、みんなが『私たちのものだ!』と思えるような公園にするには、どうすればよいのか？」を考え、行動に移すための講座でした。この講座での対話における最初の「問い」は、「あなたのこれまでの人生における、『公園』でのステキな体験は？」というものになりました。自分自身の体験から、公園のもつ機能や、その理想的な状態をイメージするところからスタートしたのです。

そして2つめの側面は、「講座の中で、参加者一人ひとりが、実際に何かを『体験』できる要素を盛り込むようにしよう」ということです。見るだけ、聞くだけではなく、書いたり、話したり。何かを調べたり、身体を動かしたりするのも体験です。そういう意味では、自分たち自身で机や椅子を動かすのも、立派な「体験」です。自分たちで、自分たちのほしい場をつくる（→p.24）。これもまた、「お客さん」から「主役」へと転換していく、一つの働きかけであるといえるでしょう。

「フューチャーセッション・『わたしたちの公園』をつくる！」では、実際に近くの公園に移動し、みんなでお弁当を楽しんだ後、それまでに話しあった内容を踏まえて簡単なフィールド調査を行いました。実際の体験を踏まえることで、その後の話しあいは、より具体的・実践的なものとなりますし、「共通の体験」をベースに考えることができるため、コミュニケーションも一段深いものとなりました。

□ キーワード4・一方通行ではなく「相互作用」

最後のキーワードは「相互作用」です。一方が「話すだけ」、他方が「聞くだけ」、影響をあたえるのは話す側だけ、という関係性ではなく、お互いに語りあい、聴きあうことで、お互いがお互いに影響を与えあう。それが「相互作用」です。

たとえば、家で一人、映画のソフトを観ているとします。その人は映画に影響を受けるでしょうが、そのままでは、その人が他に影響をあたえることはありません。

つくば市民大学では、2013年に「スロー・シネマ・カフェ」という講座を開催しました。『サティッシュ・クマールの 今、ここにある未来』というドキュメンタリー映画を鑑賞した後、3名のグループで「映画を観て、もっとも印象に残っていることは？」というお題でバズセッションを行い（→p. 24）、次いで6名のグループで、その映画のテーマに即した「問い」の下で対話を行いました。36名が、映画の影響を受けるとともに、「映画を観る」という共通の体験を元に、互いに影響を与えあう。その影響がさらなる影響につながり、映画鑑賞は、非常に豊かな体験となりました。

少人数で話す「バズセッション」という手法は、相互作用の要素を取り入れる、もっとも簡便な方法であるといえるでしょう。たとえば、「講演→質疑応答」というよくある形式の講座であっても、質疑応答の前に、近くに座っている2～3人で、「話を聴いて、もっとも印象に残っていることは？」「疑問に思ったこと、もっと知りたいと思ったことは？」などというお題で、3～5分間のバズセッションを行えば、だいぶ違った場となるはずです。

学ぶということは、情報や知識など、なにか新しいものを付け加えることではありません（もちろん、そのような側面もありますが、それは「学習」のほんの一部に過ぎません）。学ぶというのは、私たちが、私たち自身のものの見方や捉え方（カタい言葉でいえば「認識法」や「世界観」）を更新する、あるいは再構成することなのです。世界とのかかわり方を、つくり・かえること。それは、相互作用によって初めて可能となるのではないのでしょうか。

2) つくりかた

■ プロデュースとは

～「この指とまれ！」の旗をつくって大きく振る～

さて、それではここからは、具体的な方法を考えていきましょう。第2章は「企画づくり（プロデュース）」のポイントです。

講座の企画とは、ものすごくシンプルに考えれば、「だれと」「なにを」「どのように」学ぶ場をつくるのかを明確にして、「この指とまれ！」の旗を掲げるということに他なりません。

まずは、「だれと」（対象・仲間）から考えてみましょう。企画づくりのご相談に乗る際、「そのことを、どなたと一緒に考えたいですか？」とご質問すると、多くの場合「いや、興味がある方であれば、どなたでも……」という答えが返ってきます。もちろん、実際には「どなたでもお越しく下さい」となるのですが、最初から「誰でも」と考えていては、結果として「誰にも」フィットしない内容や進め方になってしまうことが多いものです。まずはできるだけ具体的に、「つくば市のセンター地区に住んでいる、40歳代の、自営業の男性の、〇〇さん」などと、特定の個人をイメージした方がうまくいくと思います。

次に、「なにを」（テーマ）と「どのように」（方法）ですが、テーマについてはp.11～13に、方法についてはp.14に詳しく記していますので、そちらをご覧くださいだければと思います。方法について一つだけ先に述べるとすれば、基本的には「対話を中心に据える」ことをおすすめしています（第4章参照）。ただし、対話の下地をどのようにつくるか——自らが話題提供を行う、ゲストを招く、書籍や映像作品をベースにするなどがあります——によって、コーディネーションの仕方が変わってくることに注意が必要です（第3章参照）。

なお、「だれと」「なにを」「どのように」という3要素を支えるのは、そもそもの「なぜ」です。なぜ、そのような講座を開きたいと思ったのか。その講座を通じて、何を実現したかったのか。その最初の思いこそが、旗を大きく振る原動力になります。もう一度、原点をしっかりと言葉にしてみましょう。

□ テーマ設定

～ 地域や社会が「こうなったらいいな！」から始める ～

なぜ、そのような講座を開きたいと思ったのか。その講座を通じて、何を実現したかったのか。この「なぜ」が明確になれば、おのずと「なにを」(テーマ)も見えてきます。つまり、「なぜ」と「なにを」は表裏一体なのです。

ですので、ここでいう「テーマ」とは、「歴史」や「英語」、「コミュニケーション」のように、単に科目や題材を表すものとは異なります。少なくとも、「単語」ではなく「短文」で表現されるものであると考えてください。

具体的な例を挙げてみましょう。ある時、「映画について語りあう場を設けたい」という相談を受けました。しかし、「映画」は題材に過ぎず、テーマとはいえません。そこで、「なぜそのような場を設けたいと思ったのですか？」という質問を核に詳しく話を伺うと、「子どもの頃から『同じ映画を観ても、感想を語りあうと人それぞれ』ということがとても面白かった」「仕事でモンスタークレーマーの存在に悩んでいるが、人と人の〈違い〉に気づけないことがそういう行動の一つの原因なのではないかと思う」「みんなが様々な〈違い〉について気軽に話せる場があれば、互いにギスギスすることなく、暮らしやすい社会になるのではないか」といった、その方の「ベースにある思い」を掘り下げることができました。そこで、「どのような映画だと、観る人の『価値観の違い』が出やすいでしょうか？」とお尋ねしたところ、「家族のあり方を描いた映画かもしれないですね」ということになり、そこから講座のテーマは「家族を描いた映画を題材に語りあい、お互いの『価値観の違い』を楽しむ」という表現にまとまりました(2014年、「かぞくについてのシネマトークカフェ」として開催)。

ここで一つのポイントとなるのが、「モンスタークレーマー」という「解決すべき問題」ではなく、「互いにギスギスすることなく、暮らしやすい社会」という「創造したい未来」が起点となっているところです。多くの人が共感を覚えるのは「ポジティブな思い」です。どんなに深刻なテーマを扱うにしても、「つらい問題を解決する」と捉えるのではなく、「ほしい未来を創造する」という姿勢でテーマを設定するのがおすすめです。

□ 政治・経済ではなく「関係」にフォーカスして解決策を探る

「問題解決ではなく未来創造」といっても、それは「問題解決をめざさない」ということではありません。地域には問題が無数にあります。多くの地域で、買い物困難者、孤立死、ひきこもり、シャッター通り、空き家、耕作放棄地などが増え続けており、これらの問題と向きあうことは「学びあいの場」の重要な使命です。ただその際、初めから「問題を解決する」というモードだと、ともすると「犯人探し」が始まり、その瞬間に「他人事」になってしまうことが多いのです。

その最たる例が「床屋政談」でしょう。「政策が悪いから」「景気が悪いから」となってしまうと、もはや私たちの手の届かない領域の話になってしまいます。そうではなく、結果として問題の解決をめざすのですが、その時に「ほしい未来を創造する」というアプローチをとれば、そこには常に「自分自身」がしっかりと存在する（「自分事」になる）ようになります。

最終的には政治や経済の制度やシステムにたどり着くとしても、まずは「ほしい未来」を手にするために、私たち自身が、人々や、社会や、自然と、どのようにかかわっていくのか、その「かかわりかた」を考え、変えることから始めたいと思うのです。

2014年にスタートした「子どもたちが、しんどい。～寄りそう前の勉強会～」は、子どもを取り巻くさまざまな「生きづらさ」を知り、私たちにできることを明確にした上で、社会環境に働きかける活動に結びつけることをめざす講座です。「子どもの貧困」という言葉に象徴されるように、まさに制度やシステムに起因する「問題」であり、最終的な解決には政治や経済の領域での大きな動きが必要な事象かもしれません。だからといって、不平不満を言い募ったり、愚痴をこぼしたり、嘆いてばかりいても、何も変わりません。目の前の子どもの『生きづらさ』を軽くするために、さらには、ひとりでも多くの子どもの『生きづらさ』を抱えずに暮らせるような地域にするために。誰かが何かを動かしてくれるのを待つのではなく、まずは自分が動く。そのためのきっかけとなるような場をつくりたいという思いで、企画立案された講座です。

□ アウトカム（講座終了時にどうなっていればよいか？）を明確にする

テーマがある程度見えてきたら、次に行いたいのが「ゴール（目標）」の設定です。目標の類義語に「目的」がありますが、目的は「なぜやるか」であるのに対し、目標は「どこまでやるか」ですね。「めざすところ」といってもよいでしょう。

この「目標」は、大きく2つに分けて考えることができます。1つは「アウトプット（Output）」。アウト（外に）プット（置く）ですから、生み出すもの、成果物です。その講座が終わった時に、具体的な成果物として、目の前に何があればよいか。p.5で例に挙げた「防災ラジオドラマをつくろう」であれば、7分間のラジオドラマの音源ですが、学びあいの場では、「特にこれといったアウトプットはない」ということも多くあります。

ただし、もう1つの「アウトカム（Outcome）」は、必ず設定すべきものです。アウト（外から）カム（来る）ですから、得られるもの、状態です。その講座が終わった時に、参加者にどのような状態になってほしいか。主語はあくまでも「参加者」であることに注意が必要です。そして「状態」ですから、「〇〇が□□している」「〇〇が□□になっている」などの形で表現されます。

2014年に開催した「つくばファシリテーションフォーラム」は、それまでの「対話ファシリテーター育成講座」に参加した受講生有志で実行委員会を構成し、約半年、全9回の会議を通じてつくりあげたイベントでしたが、全9回の会議のうち、前半4回はアウトカムを考えることに費やしました。その結果、私たちが設定したアウトカム（フォーラムの参加者に、フォーラム終了時に、どのようになっているほしいか）は、「話しあいをしたくなる、ファシリテーションを試したくなる、コミュニケーションが楽しくなる」というものでした。そこから、「体験を通じて、試したくなる。」というコンセプトや、「やってみて、やってみよう つくばファシリテーションフォーラム」というキャッチコピーが生まれるとともに、第5回以降、具体的なコンテンツ（何をするのか）やプログラム（どのように組み合わせるのか）、オペレーション（誰が何をするのか）の話をスムーズに進めることができるようになったのです。

□ プロセス（全体の流れ）とプログラム（各回の進め方）をデザインする

企画づくりの最後のステップは、「どのように」（方法）を考えることです。単発の講座であれば、進め方を考える「プログラム・デザイン」を、連続講座であれば、それに加えて、全体の流れを考える「プロセス・デザイン」を行うこととなります。

ここでは、2010年に開催された「多様性に気づく、多様性を築く～『いけばな』を通して～」という講座を例にとりて見てみましょう。この講座は、趣味でいけばなを続けている会員の、「視覚障害者と晴眼者がともに『いけばな』を楽しめる場をつくりたい」という思いから生まれたものです。作品づくりを単発のイベントで終わらせるのではなく、全6回の講座とし、参加者が様々な角度から「多様性」について気づき、学べるようにしました。

まず全体の流れ（プロセス・デザイン）ですが、第1回から第4回までは、コミュニケーション・映像表現・いけばな・バリアフリー研究のプロフェッショナルがそれぞれワークショップを行い、多方面から「植物や自然とのかかわり方」や「人と人とのかかわり方」を学ぶ場としました。そして第5回が、最終回の「いっしょにいけばな」ワークショップをどのように実施するかを考える企画会議。最終回が本番という流れでした。

そして、第1回～第4回の各回3時間の進め方（プログラム・デザイン）は、まず大枠として、前半2時間をテーマ別のワークショップ、後半1時間を最終回に向けての企画会議としました。そして前半2時間は、基本的には各回の話題提供者にお任せとするものの、レクチャーや映像鑑賞、デモンストレーションなどは30～45分程度とし、参加者同士の対話や、実際の体験（いけばなを生けてみる、点字を触読してみる、白杖を使って歩いてみるなど）を中心に据えていただくよう願いました。

プログラムは、そのとおりにきっちり進めるためのものというより、進め方のイメージを明確化・共有化するためのものだと考えたほうがよいでしょう。また、慣れないうちはどうしても中身を盛り込み過ぎてしまう傾向があります。時間にゆとりを持たせた計画を心がけたいものです。

～ プログラム・デザインの例 ～

つくば発達障害キャリア支援ネットワークの就労支援事業で就労トレーニングに取り組んでいる訓練生からの「自分たちと同じような『コミュニケーションに関する困り感』を抱いている人は多いはず。それを解消する講座を開いてほしい」というリクエストに応じ、協働で開催した講座のプログラムです。

「聴く力・話す力を高めるワークショップ」プログラムデザインシート

2014/4/5 徳田太郎

- 日時: 4月19日(土) 14:00～16:00(120分間) 場所: つくば市民大学
- 対象: 会話を苦手意識があり、人との会話を高めたい、楽しみたい方(高校生以上)
- 参加: 27名(うち7名は訓練生) + アシスタント7名(ベルガ3名・ユニベル2名・LSC1名・星の子1名) = 計34名
- Outcome: 相手の意見を聴き、自分の意見を伝えることが無理なくできるようになっている。
- Agenda: ウォーミングアップ / 聴く時・話す時に大切なこと / 練習と「イトコさがし」 / 会話を楽しむワーク
- Role: 聴く・話すを楽しむ人 = みなさん / お手伝いする人 = 徳田 + アシスタント
- Rule: 批判や助言はしない / みんなで時間をわかちあう / 無理をしない、無理をさせない
- プログラム:

時間	内容	座席配置	グループサイズ
13:00 60分	設営・準備 ・会場のレイアウト 会場前方に、イスのみ32脚を扇型に配置(8脚×4列) 会場後方に、カフェテーブルを7つ配置 ・受付・名札コーナー・喫茶コーナーの準備		
14:00 05分	主催者あいさつ ・感謝の気持ちと開催の趣旨を伝える	扇形	全体
14:05 05分	オリエンテーション ・OARRを伝える		
14:10 10分	ウォーミングアップ ・属性で分かれる / 指向性で分かれる		
14:15			
14:20 05分	グループ分け	島形	5名×7G
14:25 05分	グループ内で自己紹介 ・名前+情報1つ(1人30秒) / アシスタントがモデリング		(7人×1・参3名)
14:30 25分	聴く時・話す時に (a)あなたは、人と話すとき、何が大切だと思いますか? (b)あなたは、人の話を聴くとき(人に何かを訊ねるとき)、何が大切だと思いますか?		
14:35	大切なこと		
14:40	・グループ(a・b各5分) アイデア出し / アシスタントが付箋に記録		
14:45	・全体(a・b各5分) アシスタントが発表	扇形	全体
14:50			
14:55 10分	休憩		
15:00			
15:05 35分	練習と 「イトコさがし」	島形	5名×7G
15:10	・1セット6分(会話4分+FB2分) × 5セット(全員が話し手を体験)		(7人×1・参3名)
15:15	話し手 = テーマに沿って自分の思いや考えを話す		
15:20	聴き手(訊き手) = 相手の話を聴く(共感したり、質問したりする)		
15:25	見学者 = 話し方・聴き方のいいところを探し、メモして後で伝える		
15:30			
15:35			
15:40 15分	会話を楽しむワーク		
15:45	・テーマに沿って自由に会話(10分、全員が話し手を体験)		
15:50	(徳田が全グループのタイムキーパー「あと5分です」「あと2分です」)		
	・ワークシートを使ったふりかえり(5分)		
15:55 05分	主催者あいさつ ・感謝の気持ちを伝える	円形	全体
16:00 05分	アンケート記入		
	片付・撤収		

■準備物:

- ユニベル: □カフェテーブル×7台 □イス×35脚 □ホワイトボード×2枚 □アシスタントマニュアル×7部
- A3用紙×14枚 □付箋×14束 □水性マーカー×14本 □ボールペン×35本 □名札ケース×35個
- 紙芝居×1セット □テーマカード×7セット □ワークシート×35枚 □話し手用アイテム×7個
- ベルガ: □受付名簿(50音順)×2枚 □名札×35枚 □アンケート用紙×35枚 □ベルガチラン×20枚 □茶葉セット

3) あつめかた

■ コーディネーションとは

～ 人と人とを対等につなぎハーモニーを得る ～

企画立案、言い換えるならば「コト」への働きかけが終わったら、次は「ヒト」への働きかけです。第3章では、「コーディネート」と「プロモーション」について考えていきます。

まずは、コーディネートです。コーディネートは、「二者あるいはそれ以上の個人、機関、施設、団体の間に対等な関係をつくり、各々が最大限にその特性を発揮できるよう、調整・調和を図ること」（筒井のり子さん）などと定義されます。平たくいうと「つなぐ」ことですが、この定義の中には、「なぜつなぐのか」「どのようにつなぐのか」がしっかりと記されています。そう、「調和を図る」ために「対等に」つなぐのですね。

講座の場合は、話題提供者や進行役と、参加者とを「対等につなぎ、調和を生み出す」のがコーディネートであるといえるでしょう。

「対等に」ですから、両者の関係は、上下関係や主従関係ではありません。必要なのは「先生」ではない（→p. 5）というのは、この点にも関係してきます。また、「調和を生み出す」というのは、「お互いに変化する」と言い換えることもできるでしょう。一方だけが影響を受け、変化するものではありません。p. 9の「相互作用」は、参加者同士の相互作用にはとどまらないのです。つまり、話題提供者や進行役と、参加者との双方が、フラットな関係でお互いに学びあう中で、変化していく。そのような場をつくるために、両者に適切にアプローチしていくのが、講座におけるコーディネートです。

ここでは、実際の講座における、両者へのアプローチの例をご紹介します。p. 17 では、講座に参加申し込みをいただいた方にお送りする「参加のしおり」の例を、p. 18～19 では、講座で話題提供いただく方にお送りする「話題提供のお願い」の例を、それぞれ掲載しました。

□ 誰に・どのように参加してもらうかをデザインする ～ 「参加のしおり」の例 ～

〇〇さま こんにちは。つくば市民大学／ユニバーシタスつくばの□□です。
このたびは、つくば市民大学公開講座『主体性を育む学びの場をつくる「3つの働きかけ」を磨こう』に参加お申し込みをいただき、誠にありがとうございました。ここに、「参加のしおり」をお届けいたします。お越しになる前にご一読くださいますよう、お願いいたします。

■日時

2015年1月10日(土)13:00～16:00

※開場・受付開始は12:00です。昼食ご持参の方は、会場内でお召し上がりいただけます。定刻で開始しますので、時間に余裕を持ってお越しくださいませ。

※16:00 でいったん終了となりますが、その後、30分～1時間ほど、学びを深める時間を設けます。ご都合のよい方は、引き続きご参加くださいませ。

■会場

つくば市民大学(つくば市東新井15-2 ろうきんつくばビル5階)

※詳細は <http://tsukuba-cu.net/access.html> をご覧ください。

※駐車場はありません(敷地内の駐車場はご利用いただけません)。公共交通機関、または近隣の有料駐車場をご利用ください。

■受講料

2,000円(大学生以下1,000円)

※講座当日、受付にて承ります(現金のみの扱いとなります)。

■お願い

講座の中で、ご参加のみなさんに、これまでの人生における、以下のような体験をお伺いする機会があります。ぜひ、それぞれの体験を思い出し、イメージしておいていただければと思います(特にメモなどを持参する必要はございません)。

・自分から「学びたい!」と思って学んだ体験、または「自分自身で学んだ!」と感じた体験は?

・学びの中で、自分ごと感・当事者意識が高まった体験は?

※子どもの頃の体験、大人になってからの体験のいずれもOKです。

■その他

・特に準備すべき持ち物はありません。筆記用具程度で結構です。

・リラックスした服装でお越しください。

・お飲み物を用意しております。マイカップの持参にご協力ください。

■当日の緊急連絡先:

つくば市民大学 TEL. 029-828-8891

今回は、30名程度の方々にご参加いただき、ワークショップ形式(参加・体験型)の講座となります。ぜひ、ともに学びの場をつくっていきましょう。

また、興味・関心のありそうな方にご紹介いただけますと幸いです。

それでは、当日お会いできますこと、楽しみにしております!

□ 誰に・どのように話題提供してもらうかをデザインする ～ 「話題提供のお願い」の例～

〇〇さま こんにちは。つくば市民大学／ユニベルシタスつくばの□□です。
このたびは、つくば市民大学主催講座「市民の眼から見た海外の国ぐに」への話題提供をご快諾いただき、ありがとうございました。
当日に向けて、以下4点、ご連絡申し上げます。
こちらを参考に、話題提供の【内容】と【方法】をご検討いただければ幸いです。

■つくば市民大学とはどのような場か

- つくば市民大学は、「ユニベルシタスつくば」という市民組織と、「中央労働金庫」という金融機関が協働で企画・運営を行う、非営利・民間の学びの場です。
- “まなぶ・つながる・つくりだす”というキャッチコピーで、世代や立場、組織の枠をこえて学び、交流するなかから、地域や社会の課題を解決するために私たち自身ができることを探っていく場をめざして、講座の企画・運営を行なっています。
- したがって、つくば市民大学での講座は、以下のような特徴を有しています。
 - (1)市民大学のコンセプトに即したものであること = 「まなぶ」にとどまるのではなく、世代や立場、組織の枠をこえた交流(「つながる」)や、地域や社会の課題を解決するための知恵の創出(「つくりだす」)につながるものであること
 - (2)公益性を意識した市民向けの公開型講座であること = 多様な参加者に開かれたものであること、「自分や自分たちがしたいこと」だけでなく「社会から求められていること」を意識したものであること
 - (3)参加体験・相互作用の要素を含む講座であること = 一方通行の講義形式だけではなく、講師と参加者、および参加者同士の対話の時間などが確保されていること

■この講座のコンセプト(趣旨＝目的・目標)は何か

- この講座は、「お互いの違いを知り、共生できる社会の可能性を探ることで、多様性に満ちた豊かな社会を考える」ことを目的とした、ダイバーシティ学科の一環として開催されます。
- 講座のタイトルである「市民の眼から見た海外の国ぐに」が示す通り、ニュースでは知り得ない、その国で暮らす一般市民の普段着の暮らし、「旅行者」ではなく、長期間滞在した「生活者」だからこそ知り得た、その国の良さや素晴らしさを、一般的・抽象的・教科書的な話ではなく、具体的に「見たこと、感じたこと、考えたこと」を中心に「一市民の視点」で伝えていただき、その上で「国は違えども同じ人間として通じあえること」を参加者同士の対話で探ることを、目的としています。

■当日、話題提供者に期待する役割は何か

・まず、基本的なスタンスとして、「講演」ではなく「話題提供」であることにご留意いただければと思います。主役は「参加者」の側であり、参加者一人ひとりが「お互いの違いを知り、共生できる社会の可能性を探ることで、多様性に満ちた豊かな社会を考える」ような対話をするためのきっかけを提供していただくことが、最大の役割となります。

・また、「市民の眼からみた～」というタイトルに象徴される通り、「その国で暮らした一市民の視点」を中心に据えていただければと思います。すなわち「自分がその国で行ったこと(仕事)」ではなく、「暮らしの中で見たこと、感じたこと、考えたこと(文化)」にフォーカスしていただければと思います。

・当日は、14:00～16:00 の 2 時間の開催ですが、概ね、話題提供(質疑応答含む)と、参加者同士の対話を 5:5 くらいの時間配分でご検討いただくとよいかと思います。たとえば、話題提供 45 分、質疑応答 15 分、休憩 10 分、参加者同士の対話 50 分程度を想定しています。

・参加者同士の対話は、

(1)話題提供の中で、もっとも印象に残っていることは？

(2)日本にはない「その国の良いところ」、その国にはない「日本の良いところ」は？

(3)その国の人に聞いてみたいこと、その国の人に伝えたいことは？

といったテーマを想定しています。進め方や問いについては、改めて相談させていただきます。

■当日までに必要な、具体的なアクションは何か

・まずは、web やチラシでの、講座の告知に必要なデータとして、「告知文」「話題提供者の簡単なプロフィール」「現地の様子が分かる写真 2 枚程度」の 3 点をお送りください。告知文やプロフィールの内容とボリュームは、過去のものをご参照ください。また、写真は、観光地の風景ではなく、人々の暮らしが分かるようなものがベターです。できれば、○月○日までにお送りいただければ幸いです。

・可能であれば、事前に直接お会いして、ご説明・お打ち合わせをさせていただければと思います。いくつか候補日を頂戴できれば幸いです。

・お打ち合わせ後で結構ですが、話題提供に用いる、投影資料や配布資料があれば、ご準備ください。PC、プロジェクト、スクリーンは、備え付けのものがあります。配布資料は、1～3 枚程度であれば、市民大学で印刷可能です(当日のご持参で大丈夫です)。

・その他、ご不明の点などありましたら、お気軽にお問い合わせください。

以上、よろしく願いいたします。

■ プロモーションとは

～ 大切なのは「伝える」ことではなく「伝わる」こと ～

思いを込めて企画した講座。せっかくですから、多くの人に知ってもらい、足を運んでもらいたいですよね。そこで重要となるのが、プロモーション活動です。とはいえ、資金や労力には限りがあります。ですから、「テーマに興味・関心のある方々に対して、いかに効率的・効果的に講座の存在を知ってもらうか」がポイントとなります。

プロモーションとは、「認識（知ってもらう）」と「誘導（動いてもらう）」のための活動です。分かりやすい例は、「こんな製品（サービス）がありますよ！買ってくださいね！」という、企業のプロモーション活動ですね。では、企業は、具体的にどのようなプロモーション活動を行っているのでしょうか？ 順不同に挙げてみましょう。

広告・広報（新聞・雑誌・テレビ・ラジオ・インターネット etc.）、チラシ・パンフレット・ポスター・看板、サンプル配布・ノベルティ提供、イベント出店・キャンペーン開催、営業訪問・キャッチセールス・ロコミ……。

さて、私たちが、限られた資金と労力でできそうなことは何でしょう？

あまりにも基本的なことではありますが、「直接お声かけする」ことの効果は無視することができません。来てもらいたい人には個別にお誘いする、さらにさかのぼれば、企画の段階で「来てもらいたい人にとって、参加しやすい日時を設定する」ことが重要です。

そしてもう一つは、インターネットの活用です。web サイトやブログはもちろんですが、twitter や facebook などの SNS は、お金をかけることなく、地理的な制約を超えて、興味・関心の近い人々に対してしっかりと情報を届けることができる、非常に訴求力のあるツールです。これを有効活用しない手はないでしょう。

いずれにせよ重要なのは、「認識（知ってもらう）」にとどまらず、「誘導（動いてもらう）」につなげることです。そのためには、きちんと「伝わる」ようにする工夫が必要となります。

□ アナログもデジタルも「視座・視野・視点」を意識する

では、どうすれば「伝わる」ようになるのか？

チラシのように紙面に制約があるアナログツールはもちろんですが、SNS などのデジタルツールであっても、「シンプルなメッセージ」を心がけることが重要です。

「伝えよう」という思いが強くなればなるほど、送り手目線となり、結果として情報を盛り込み過ぎてしまう傾向があります。「伝える」ことではなく、「伝わる」ことが目的なのですから、あくまでも受け手目線で考える必要があるのです。

そこで有効となるのが、「視座・視野・視点」という3点セットを意識することです。

「視座」とは、「誰の立場で考え、表現するか？」ということ。自分の立場で「こういうことをします。来てください」という姿勢で書くのではなく、常に参加者の立場で、「どんな体験ができるのか」「何が得られるのか」を考え、表現することを心がけましょう。

「視野」とは、「何を盛り込み、何を捨てるか？」です。日時・場所・参加費などの必要事項は欠くことができませんが、参加申込後に送る「参加のしおり」（→p. 17）のタイミングで伝えればよいことは思い切って省略し、この段階では「参加するか否かを判断するために必要な情報」に絞るようにします。

そして「視点」は、「どこを強調するか？」です。チラシなどの場合は、ジャンプ率（もっとも大きい文字と、もっとも小さい文字との比率）を上げることでメリハリをつけることができますし、web の場合は、目立たせたい情報の上下に余白を設けるなど、行間隔を工夫することで、ある程度の強調が可能となります。

そして重要なのは、講座の内容を端的に、そして魅力的に伝えるコピーです。twitter の「140 字」という制限は、「シンプルなメッセージ」を練り上げるためのよいトレーニングとなります。過不足なく「伝わる」表現を磨いていきましょう。

4) はこびかた

■ ファシリテーションとは

～ 響きあう場の「助産師」になろう！ ～

さて、いよいよ講座当日を迎えました。具体的にどのように運営すれば、講座が「人々がともに集いあい、問いあい、語りあい、聴きあい、学びあうこと」で、響きあう関係が紡がれ、新しい価値が醸される。異なりから豊かさが生まれ、希望と知恵が育まれる。そのような、民主的で創造的な場と機会」(→p. 3)になるのでしょうか？

すでに確認した通り、学びあいの場＝ワークショップには「先生」はいません(→p. 5)。そこにいるのは「ファシリテーター」という存在です。

ファシリテーターとは「ファシリテーションする人」という意味です。では、ファシリテーションとは何か。直訳すると、「～を支援する」「～を促進する」という意味です。特に「人と人のかかわりを支援する、促進する」という文脈で用いられることが多く、ここ数年は、ワークショップのみならず、会議やミーティングなどが円滑に進むよう、そして創造的な場になるように支援・促進する役割として、ファシリテーターという存在が注目を集めつつあります。

ファシリテーターは、時に「助産師」にたとえられます。産むのはお母さん、産まれてくるのは子ども。助産師さんが代わりに産むわけではありません。助産師さんの仕事は、お母さんがもともと持っている「産む力」を引き出し、育むことで「子どもが産まれてくる」ことを支援・促進することです。

ファシリテーターも同じです。ファシリテーターが学びの「答え」を持っているわけではありません。あくまでも、参加者一人ひとりが持っている「学ぶ力」を引き出し、相互のかかわりあいを育むことで、「豊かな知恵がうまれてくる」ことを支援・促進するのがファシリテーターの役割なのです。

以下、学びあいの場の「助産師」として、どのような働きかけが有効か、具体的な4つのアクションを見てみましょう。

□ オリエンテーション（方向づけ）を工夫する

1つめは、オリエンテーションです。

オリエンテーションという語は、オリエント（東）から来ています。昔、ヨーロッパで、教会を建てる際に、太陽の昇る方角を基準とした、つまり「方向を定める」ことが、オリエンテーションの語源なのです。

多様な人が集う場で、その多様性を活かしつつも、テーマに沿った学びを深めていくためには、適切に「方向づけ」をする必要があります。ですから、講座の冒頭では、しっかりとオリエンテーションをすることが不可欠なのです。

オリエンテーションで伝えるべき要素は、大きく分けて4つあります。1つめは「めざすこと」。p.13で確認した「アウトカム」です。2つめは「すすめかた」。p.14の「プログラム」ですね。3つめは「なかまたち」。部屋に集っている全員に、何らかの「期待される役割」があるはずです。そして4つめは「おやくそく」。参加にあたって、どんなことを意識してもらいたいのかという「心得」や「ルール」です。この4つを、口頭で述べるだけでなく、紙に書いて貼っておくなどして、参加者全員でしっかりと共有するようにします。

2014年に開催した「みんなで防災@つくば」という講座を例に、4つの要素を確認してみましょう。

- ・めざすこと：多様な人々が集まる状況で災害が発生した時に、一人ひとりに何ができるか（どのように助けあえるか）がイメージできている / （それを通じて）多様な人々が暮らす地域の中で、災害に備えて「自分にできること」がイメージできている
- ・すすめかた：お互いを知る / 地域の被害想定を知る / 昼食休憩（非常食体験） / 災害時の状況をイメージする / 〈困り感〉の解消方法を考える / 災害への備えを考える
- ・なかまたち：ともに「何ができるか」を考える人＝みなさん / そのプロセスをお手伝いする人（全体の進行をする人＝〇〇さん・情報を提供する人＝〇〇さん・記録のために撮影する人＝〇〇さん）
- ・おやくそく：みんなが尊重される場を、みんなで作ろう

□ レイアウト（机・椅子の配置）とグループサイズ（話しあう人数）を工夫する

2 つめは、「空間のデザイン」です。ここでのポイントは、「思い込みから自由になろう」ということに尽きます。

何かを「学ぶ」場をつくろうとすると、学校の教室からの連想なのか、全員の机と椅子が先生を正面にずらっと並ぶ、いわゆる「スクール（教室）形」にしたり、何かを「話しあう」場をつくろうとすると、「〇〇協議会」などのおかしい会議からの連想なのか、真ん中に大きな空白地帯ができる、いわゆる「ロの字形」にしたり……。それが「当たり前」になってはいませんか？

また、話しあいをする際には、最初から最後まで、常に「全員で」しなければならないと思い込んではいませんか？

レイアウト（机・椅子の配置）にせよ、グループサイズ（話しあう人数）にせよ、「こうでなければならない」という決まりはありません。大切なのは、「場に自分たちを合わせるのではなく、自分たちに場を合わせる」こと、つまり動かせるものはどんどん動かすこと。そして、「途中で変えてもよい」ということです。

p. 15 のプログラム・デザインの例をご覧ください。右側に「座席配置」と「グループサイズ」という欄があります。最初は、オリエンテーション（→p. 23）に集中してもらうために、椅子だけで扇形をつくって全員でスタートしていますが、本編では、じっくりと考えたり、実際に体験をしたりするために、少人数のグループに分かれ、机を使って島形としています。そして最後は、ともに学んだ仲間の存在を確認し、一体感を持って終われるよう、全員で椅子だけで円形をつくっています。

1人で考える、ペアやトリオでしっかりと聴きあう、小グループで話しあう、全体で共有するなど、グループサイズを変えることで、限られた時間の中でも双方向の学びの場をつくることができます。また、クリップボード（下敷き）を活用すれば、椅子だけでのレイアウトが可能となります。全員で協力して場面を転換することで、「自分事」感も高まっていくのではないのでしょうか。

□ チェックインとチェックアウト（一人一言で思いを分かちあう）を行う

3つめは「一人一言で思いを分かちあう」です。端的に言えば、「一言ずつ話して始まり（チェックイン）、一言ずつ話して終わる（チェックアウト）」ということです。これについては、p.7ですでに触れていますね。

初対面の人が多いような場では、緊張からなかなか自分の思いや考えを口にできない人が多いもの。そのままですと、特定の参加者だけが場を独占してしまうことにもなりかねません。ですから、まずは、いま・ここに、どのような人々が集っているかを、お互いに確認することが必要となります。ただ、「自己紹介」としてしまうと、所属や立場など、どうしても「肩書き」が前面に出てきてしまいます。そこで、「講座に対する自分自身の動機（なぜ、いま・ここにいるのか?）」や「期待（終わった時に、どうなっていたいのか?）」を一言ずつ話すようにすれば、肩書きに縛られず、かつお互いがどのような思いでいるのかを知ることが可能となります。

終了時も、「感想（どのような体験をし、どのように感じ、考えたのか?）」をあらためて言葉にすることで、自分自身の学びを確認することができますし、空間と時間を共有した仲間たちの思いや考えを聴きあうことで、その学びはさらに豊かなものになるでしょう。

少人数（15名程度まで）であれば、オリエンテーション終了後、「今日の講座にどんな人が集まっているのかを確認するために、お互いの顔が見えるよう、きれいな円をつくりましょう。一度お立ちいただいて、椅子を移動していただけますか?」と促し、「それでは、一言ずつお声を聴きあってからスタートしましょうか。『呼ばれたいお名前』と、『今日の講座への期待』の2つを、お一人30秒くらいでお願いします」などと始めるとよいでしょう。場合によっては、A4サイズの紙と水性マーカーを使って、上記の2点を書いてもらってから実施すると、極端に話が長くなってしまうことを避けることができると同時に、お互いに「聴く」ことに集中できるようになります。

なお、人数が多い場合は、小グループに分かれたタイミングで行うとよいでしょう。

□ テーマやルールの「見える化」で対話の場をホールドする

4つめは、「テーマやルールの『見える化』」です。

p. 10 で、参加・体験・相互作用を重視した学びの場をつくるためには「対話を中心に据える」ことが基本となる、ということを確認しました。では、そもそも「対話」とはどのような話しあいなのでしょう。

簡単に言えば、対話とは、「テーマに関する思いや考えを深めあったり、新しい知恵を紡ぎだしたりするために行う話しあい」です。ところが、これがなかなか難しいのです。ともすれば、「ただのおしゃべりで終わってしまう」「説得と反論の応酬になってしまう」ということになりかねません。

「ただのおしゃべりで終わってしまう（≒会話になってしまう）」のは、「私たちは、何について話しあいたいのか」というテーマからずれてしまうことが原因です。また、「説得と反論の応酬になってしまう（≒議論になってしまう）」のは、「私たちは、どのように話しあいたいのか」というルールがおろそかになってしまうことが原因です。

これを防いで「対話」を成立させるには、テーマやルールを、目で見える状態にしておくことが効果的です。つまり、プロジェクトで投影する、紙に書いて掲示するなど、いつでも確認できるようにしておくのです。

たとえば、p. 8 でご紹介したフューチャーセッションでは、「いまある公園を、できるだけ多くの人を楽しめるものにするには、みんなが『私たちのものだ!』と思えるような公園にするには、どうすればよいのか?」という最終的な「問い」を模造紙に大きく書いて掲示するとともに、グループでの対話の際には、「あなたのこれまでの人生における、『公園』でのステキな体験は?」など、その都度の「問い」をA4サイズの紙に記して、各テーブルの真ん中に置きました。

また、考え方の相違などから「正しさを争い、相手を打ち負かすような議論」となってしまうことが想定されるような講座では、オリエンテーションで「判断を保留しよう」「前提を疑おう」「一人称で語ろう」という3つの「おやくそく」を示すとともに、これらを記したシートを常に掲示しておくようにしました。これらの働きかけで、対話の場をホールドすることが可能となります。

5) つづけた

■ リフレクションとは

～ 立ち止まれば次のあり方・やり方が見えてくる ～

さて、講座を無事終えることができると、ほっと一安心とばかりに力が抜けてしまったり、あるいは次の（別の）講座のことで頭がいっぱいになってしまったりと、その講座はあっという間に「過去のこと」となってしまいうことが多いいものです。

しかし、それではあまりにもったいない。「終わった講座を、どのように扱うか」次第で、学びは何倍、いや何十倍にも深いものとなります。

そのために、つくば市民大学では、講座終了後に「リフレクション（ふりかえり）」の機会を設けることをおすすめしています。

リフレクションとは、「反省会」とも、「打ち上げ」とも、少しニュアンスが異なります。「反省会」というと、どうしても「ここが良くなかった」「誰が悪かった」といったネガティブなイメージが付きまといまわし、「打ち上げ」というと、講座の内容や進め方とは無関係に、ただ飲食を楽しんで終わってしまう傾向が強くなります（もちろん、それはそれで意味のあることですので、ぜひ楽しんでいただきたいのですが……）。

「リフレクション」という単語を辞書で調べると、2つの意味があることが分かります。一つは「内省、熟考」。たとえば、「講座で何を学んだのか」という「内容＝コンテンツ」をふりかえること、そして「講座でどう学んだのか（学び方はどうだったのか）」という「進め方＝プロセス」をふりかえることで、学びをより深いものにすることが可能となります。

もう一つは、「反射、反映」です。ふりかえりをふりかえりにとどめるのではなく、次の企画の内容や進め方にしっかりと反映させていくことが重要です。経験を単に「繰り返す」のではなく、「積み重ねる」ことで厚みを増していくためには、不可欠の行為であるといえるでしょう。

□ コンテンツ（何を学んだか）をふりかえる

それでは、具体的にどのようなようにふりかえればよいのかを見ていきましょう。まずは、講座の内容、すなわちコンテンツのふりかえりです。

たとえば、2011年から足かけ3年にわたって開催し、講座回数38回、参加者はのべ280名に及んだ「ともに学び、考えよう 持続可能なエネルギーの未来」講座を例に見てみましょう。この講座は、第1シリーズでは自然エネルギーを積極的に利用している地域とスカイプで結んでの話題提供と対話、第2～第3シリーズでは「みんなのエネルギー・環境会議」から多様な取り組みや論点があることを学んで対話を重ねました。その後、環境ジャーナリストをゲストに迎えた特別講座を挟み、これを受けて私たち自身ができるアクションを考えた第4～第6シリーズ、13年の学園祭で広く市民に開かれたイベントを企画・準備する第7シリーズへと積み重なっていきました。

取り組みが継続した背景には、一度でも同講座に参加した方に対し、毎回「どのようなテーマで、どのような対話が行われたか」を簡潔に記したレポートを送信したことが大きかったと思います。参加できない回があっても、内容を共有しているからこそ、いつでも「戻ってこられる」場となったのです。

さらにその際、関連するイベントや実践事例を紹介するなど、次の一步を例示することで、「学びっぱなし」にならないような工夫をあわせて行うことも心がけました。このような「現場への橋渡し」も、重要な働きかけの一つです。

また、終了した講座の記録や成果報告は、ついおろそかになりがちですが、たとえば講座でどのような学びがあったのか、場合によってはそれが地域や社会の課題解決にどのように役立ったのかを丹念に記録し、発信すれば、その講座の影響が及ぶ範囲は、リアルな場を共有した参加者にとどまらず、数十倍、数百倍に広がります。

p.6でご紹介した「ガンジーに学ぶリーダーシップの旅」では、参加者が持ち回りでテープ起こしを担当し、全8回の講座終了後には、120ページに及ぶ講座記録が完成しました。このように、参加者が自ら記録・発信する側に回れば、そのプロセス自体も大きな学びの機会となるでしょう。

□ プロセス（どう学んだか）を振り返る

次に、講座の進め方、すなわちプロセスのふりかえりです。進め方といっても、当日のプログラム運営だけではありません。まさに、このハンドブックで学んできた、「つくりかた（プロデュース）」、「あつめかた（コーディネーション&プロモーション）」、「はこびかた（ファシリテーション）」といった一連の流れにおけるやり方・あり方すべてを指しています。つまり、「参加者が、講座においてどう学んだか」だけでなく、「企画者が、学びの場をどのようにつくってきたのか」をふりかえり、そこから「企画・運営のやり方・あり方」に関する学びを抽出して、次に活かしていく——ということに他なりません。

つくば市民大学でも、「フューチャーセッション・『地域×アート=?』」や「つくばファシリテーションフォーラム」など、実行委員会形式で企画・運営した講座では、「学びの場をつくること自体が学びである」という観点から、この「プロセスのふりかえり」には特に力を入れました。

つくば市民大学のふりかえりにおいては、「Keep」と「Try」という2つの切り口を多く用いています。Keep・Problem・Tryの3つの切り口を用いる「KPT」というふりかえりの手法を独自に簡易化したやり方です。

まず、テーマ（ふりかえりの範囲）を定めます。「当日までの準備において」として、プロデュース・コーディネーション・プロモーションに焦点を当てるのか、「当日の進行において」として、ファシリテーション（および具体的なオペレーション）に焦点を当てるのか、明確にするとよいでしょう。その上で、まずは「次回も（自分も）同じようにしたい」というKeep要因（継続・模倣ポイント）をどんどん挙げていきます。「〇〇を□□すること」などと、具体的な行動を示す短文で表現してもらうことがポイントです。

Keep要因が出尽くしたら、次はTry要因です。「次回は（自分は）こういう風にしたい」という改善・挑戦ポイントを、同様に「〇〇を□□すること」などとの具体的な表現で、全員が挙げていきます。

この時、必ず「Keepを出し尽くしてからTryへ移る」ようにするのが、ふりかえり自体を前向きな「学びの場」にする秘訣です。

□「つながる」と「つくりだす」を意識する

p.4 でご紹介した通り、つくば市民大学では、単に「まなぶ」ことにとどまらず、「世代や立場、組織の枠をこえて交流する（つながる）なかで、地域や社会の課題を解決するために私たち自身ができることを探っていく（つくりだす）」ことを意識しています。せっかく興味・関心の方向性を共にする仲間が集っているのですから、横のつながりが生まれるよう、さらにはそこから何らかの具体的なアクションにつながるよう、さまざまな働きかけを心がけています。

一例を挙げましょう。2011年に「発達障害の力を活かしたソーシャルビジネス」に関する講座を開催しましたが、東京で活躍する社会起業家の取り組みを知った参加者（当事者の親や支援者の方々）から、「同じような取り組みが茨城でもできないだろうか」という声が複数挙がり、講座終了後、さっそく参加者に呼びかけて検討会をスタートしました。

その結果、行政やNPO、民間企業などを巻き込んで「つくば発達障害就労支援協議会」を構成し、2012年度の茨城県「新しい公共の場づくりのための提案型モデル事業」の一環として「発達障害のある若年層への就労支援モデル事業」を実施するに至りました。モデル事業終了後も、各種支援機関・NPO・企業など16機関が参画するネットワークとして、年に3回の円卓会議を実施する他、参画機関の各種事業を相互に支援しています。

もちろん、「つながる」は何らかの組織を構成することだけではありませんし、「つくりだす」も具体的な事業を行うことに限られるわけではありません。たとえば、つくば市民大学でよく見られる光景は、講座を通じて知りあった同士が、お互いが関係している（つくば市民大学以外の場で開かれる）さまざまなイベントに誘いあって出かけたり、関連するテーマでの講座を自ら企画して、「参加者」から「担い手」へと立場を変えたり……というものです。これらも立派な「つながる」「つくりだす」であるといえるでしょう。

まずは、講座の終了時間はあくまでも「終わり（句点）」ではなく、「一区切り（読点）」であると意識することです。企画者自身も、そして参加者にも、「この学びをどう活かす？」と問いかけることから始めてみましょう。

おわりに

何十人という人が一堂に会しているにもかかわらず、言葉を発するのは、初めから終わりまでただ一人だけ。そしてその一人が熱心に説いているのは、民主的な社会のあり方であったり、創造的な地域への取り組みであったり。……そんな場への疑問が、つくば市民大学でのさまざまな実践、そしてこのハンドブック制作に至る、すべての出発点だったように思います。

本書でご紹介した一つひとつの働きかけは、決して特殊なものではありません。それでも、そのような小さな工夫を組み合わせることで、「その時、その場所、そのメンバーでしか生み出し得ない、かけがえのない学びあいの場」となるはずです。

もちろん、ここに記したものが「正解」ではありません。「私たちはこんな工夫をしているよ」「こうするともっとよいのでは」といった声があれば、ぜひつくば市民大学にお寄せいただければと思います。

個々人が相互に刺激しあうことによって「知恵の共有」や「価値の創出」が行われ、それが全体に作用して、さらに個々人へと影響を与えていく。そして、そのような流れが、まるで螺旋階段を上るように連鎖していく。そのような学びあいの場を、これからもみなさんとともに、無数に創りだしていければと願っています。

最後に、「先生にならないで」というメッセージを、もう一度だけ。

多くのことを教えることで、
あなたの虚栄心を満たそうとしてはいけません。
好奇心を呼び起こせればよいのです。
心を開かせさえすれば十分なのです。
火花を散らしさえすればよいのです。
乾いた枝があれば、炎は自然に
燃え上がるのですから。

——アナトール・フランス

つくば市民大学について

「つくば市民大学」は、学びたい、自分らしく生きたい・働きたい人が集まる場として、中央労働金庫・中央ろうきん社会貢献基金・ユニベルシタスつくばのコラボレーションにより 2009 年にオープンした、民設民営の「学びあいの場」です。

お住まいの地域や職業、年齢や興味関心にかかわらず、「暮らしやすい社会を自分たちでつくっていかう」という思いのある方であれば、どなたでもご参加いただけます。

もちろん、参加の形態は、講座の「受講」だけではありません。以下4つのテーマに該当する講座であれば、誰もが「企画・運営」する側に回る事が可能です。

- ・サステナビリティ学科：

身近な環境やエネルギーに関する講座などを通じて、未来の世代も安心して暮らせる持続可能な地球を考えます。

- ・ダイバーシティ学科：

お互いの違いを知り、共生できる社会の可能性を探る講座などを通じて、多様性に満ちた豊かな社会を考えます。

- ・コミュニティ学科：

ボランティアや市民活動、コミュニティづくりに必要な技術の講座などを通じて、地域や社会のあり方を考えます。

- ・ライフスタイル学科：

各世代の暮らし方、働き方を考える講座やゆるやかな交流の場などを通じて、自分らしい人生のあり方を考えます。

茨城県つくば市東新井 15-2 ろうきんつくばビル 5 階 (つくば駅より徒歩約 10 分)

website… <http://tsukuba-cu.net> e-mail… info@tsukuba-cu.net

徳田 太郎（とくだ たろう）

1972年、茨城県生まれ。2003年にファシリテーターとして独立、市民活動やまちづくり、医療や福祉、教育や文化などの領域を中心に、年間200日以上セミナーやワークショップを実施している。

つくば市民大学を運営するユニベルシタスつくばでは、創設時より代表幹事を務める。NPO法人日本ファシリテーション協会では、事務局長、会長を経て、現在はフェロー兼災害復興支援室長。

その他、東邦大学理学部生命圏環境科学科非常勤講師（コミュニケーション）、Be-Nature School ファシリテーション講座講師など。

連絡先：tokuda@thirdvalue.com

「学びあいの場」のつくりかた

つくば市民大学ブックレット No. 1

2015年3月20日 第1刷発行

頒価 500円（税込）

※うち50円は「いばらき未来基金」への寄附金として、茨城県内の地域課題の解決に取り組む市民活動の活性化に充てられます。

いばらき未来基金…<http://www.ibaraki-mirai.org>

著 者 徳田 太郎

監 修 つくば市民大学

発行所 つくば市民大学

〒305-0033 つくば市東新井 15-2

ろうきんつくばビル 5階

TEL：029-828-8891

<http://tsukuba-cu.net>

印刷・製本 株式会社イセブ

「まなぶ・つながる・つくりだす」がキャッチコピーのつくば市民大学での実践の中で育まれた、参加・体験型の講座をつくるための知恵をまとめたハンドブック。

「かんがえかた」「つくりかた」「あつめかた」「はこびかた」「つづけかた」の5つのステップで整理された工夫の数々は、生涯学習や社会教育における各種講座、セミナーやワークショップ、シンポジウムやフォーラムなど、人々が集いあうさまざまな現場で応用が可能です。